Vonnegut の *Cat's Cradle* と アメリカ小説の伝統

松　山　信　直

アメリカの現代作家 Kurt Vonnegut (1922–　　) の四作目の小説 *Cat's Cradle* (1963) を私は非常に興味深い小説だと思う。それは，この小説が1960年代以降の "anti-realism" のブラック・ユーモアにあふれた "new novel" の一つだからとか，127の短い章からなる "episodic collage"[1] だからというのではなく，また "ice-nine" という新しい氷の発見に基づく科学空想小説的な側面があるというだけでもなく，さらに世界の破滅を描く終末論的な小説，例えば Klinkowitz の言う "mock-apocalyptic novel"[2] あるいは John May の規定した "humorous な apocalypse"[3] に属するからというだけでもない。私が興味を持つのは，この小説が中心人物（達）の近くに位置する作中人物の一人を語り手に持っているアメリカ小説の重要な伝統の一つに連なっているからである。

Cat's Cradle の語り手 John は *The Day the World Ended* という書物を書こうとして，原子爆弾が広島に投下された日に原爆の生みの親の一人 Hoenikker 博士が何をしていたかを知ろうと，博士の子供や関係者に接触する。ところが結果的にはこの書物は完成せず，世界の破滅を目撃した語り手の回顧談 *Cat's Cradle* が生まれたという次第である。語り手が知ろうとした Hoenikker 博士は原爆製造に係わったあと，特殊な氷 "ice-nine" を作ることに成功した。普通の水は摂氏零度で凍る。この構造を変組えた "ice-nine" は摂氏46度で凍る。だからこの氷は夏でも冬でも室温では凍ったままだが，鍋にでも入れて46度以上に暖めると融けて水になる。だが，46度以下になる

と凍ってしまい，これに触れたものも凍らせてしまう。作品の最後ではこの "ice-nine" のため，海や空中の水分が凍って天候に異変が起こり，一部の人物を除いて，破壊と絶滅を迎えることになっている。

Hoenikker 博士は知的興味を引くものに熱中してしまう性癖の持ち主で，亀が首をひっこめるとき，背骨を曲げるのか，ちじめるのかどちらだということに突然興味を持つと，研究中の仕事を放棄して亀を飼育し，亀に熱中してしまう。亀やあや取り (cat's cradle) に夢中になるような奇矯さは笑って済ませることができるかもしれないが，子供や妻に対して父・夫としての関心を示さないため，子供達に家庭はなく，それぞれ孤独に陥って奇行に走らせ，妻をも死なせてしまうことになる。人間にまるで興味が無く，研究や自分の知的関心にのみ没頭するこの科学者が，倫理性を欠き，アモラルな価値感しか持たないことは恐ろしい。最初の原爆実験に成功した日に一人の科学者が "Science has now known sin." と言ったのに対して，Hoenikker は "What is sin?"[4] と問うたという。

この非倫理性は，彼の三人の子供たちにも受け継がれる。一番上の娘 Angela は大柄な醜い女性だったが，かつて父の助手でファブリテック社の社長となった男と結婚して社長夫人に収まる。次男の Newton は小人で，ウクライナの小人のダンサーと恋仲になって駆け落ちする。長男 Frank は，放浪のあげくサンロレンゾ共和国の科学と進歩省の大臣に収まる。いずれも，父の残した恐ろしい "ice-nine" を自分の個人的な利害のために利用したためだが，その結果，アメリカ，ソ連，サンロレンゾ共和国が "ice-nine" を持っていることになる。だが，三人の子供たちは，この氷がもたらした恐ろしい凍死の現場を見てその破壊力に驚き，吐き気を催すが，どのようにこの氷を持ち出したかについて色々と話はするものの，倫理性を問題にする人は誰もいなかった (p. 168)。彼らの倫理性の欠如は，勿論 Hoenikker 博士やその同僚にも通じる問題だが，実は，これらの人達だけの問題でないことを語り手は指摘する。

> "What hope can there be for mankind," I thought, "when there are such men as Felix Hoenikker to give such playthings as ice-nine to such short-sighted children as almost all men and women are?" (p. 164)

ここには，ほとんどすべての人間は Hoenikker 博士の子供達と変らない，という痛烈な風刺的認識があることは明らかだが，こんな人類に希望が無いことは，その後に訪れる破滅が雄弁に語っている。*Cat's Cradle* は人類の愚かしさと破滅を描く "great satire"[5] のカテゴリーに属するというのも尤もである。だが上の引用文に見えているように，「人類にどんな希望があるというのか？」と問いかけるのは語り手であって，*The Day the World Ended* の為の資料集めをする語り手の知覚・認識・反応が小説 *Cat's Cradle* になっていることに注目したい。

作品の後半では，語り手が訪れたサンロレンゾ共和国が舞台になる。語り手はこのカリブ海の島国で，不条理な政治世界やボコノン教という（疑似）新興宗教を経験する。サンロレンゾ島は次々と様々な国の植民地になっていたが，海兵隊を脱走した Earl McCabe とトバゴ出身の放浪者 Lionel Boyd Johnson がやってきて共和国を作り，McCabe が大統領になって経済と法律を立直し，Johnson がカトリック教に代わる新しい宗教ボコノン教を作った。Bokonon とは Johnson をこの土地のなまりで発音したものである。しかし二人の努力にも拘らず，資源に乏しいこの国では人々の苦しみは消えない。そこで二人は人々の信仰心を強めることを考え，ボコノン教を専制的な政府によって表向き禁止することにし，教主を追放し，信者は鈎にぶらさげる極刑に処することにした。そうすることによって，逆に人々の信仰心は燃え上がり，精神的な落ち着きが得られ，経済的貧困に耐え得る様になった。教主のボコノンは政府の追求の手を逃れて山の中に住み，McCabe の政府は時々ボコノン狩りをして気勢を上げるが，ボコノンは勿論捕まらず，ますます人気が上がった。このようにしてサンロレンゾ共和国は栄えてきたが，悪

虐な暴君に徹した McCabe の方は，悪人でもないのに悪人ぶらなければならないという苦悩を味わい，自分の召使い頭 Monzano を後継者に任命して自殺してしまった。その後を継いだ現大統領 "Papa" Monzano は病気で，この国の大臣に収まっている Frank Hoenikker が国のエロティック・シンボルとなっている Mona と結婚し，大統領の後継者になることを考えるが，Frank は自分より語り手の John の方が適任と考え，彼を大統領にしようとする。

このサンロレンゾ共和国のでたらめさは，こんな大統領選出や暴君と救世主の意図的な出現などに見られるが，興味の中心は，すでに多くの読者の関心を引いてきたボコノン教にある。Bokonon 教は Vonnegut の第二作 *The Sirens of Titan* の Rumfoord の宗教 The Church of God the Utterly Indifferent の延長線上にあると言える。ボコノン教主になった Johnson は，或る一時期ニューポートの Rumfoord 家の庭師兼大工だったとされている (p. 76)。Rumfoord の宗教では，神を創造主としてあがめはするが，人間は神の名の下で神の意図を勝手に推測したり，神のお気に入りだと思ったりしているが，それは嘘だ，と言う。神は人間には全く関心を持っていない。神は自分の事だけにかかずりあっているのだから，人間は神のことはほっておいて，自分達人間仲間の事に関心を持てばよい，と教える。この教会の旗は "Take Care of the People, and God Almighty Will Take Care of Himself."[6] と書いてある。一方，ボコノン教の教典 *The Books of Bokonon* の第一の書は次のような書き出しで始まる。

> In the beginning, God created the earth, and he looked upon it in His cosmic loneliness.
>
> And God said, "Let Us make living creatures out of mud, so the mud can see what We have done." And God created every living creature that now moveth, and one was man. Mud as man alone could speak. God leaned close as mud as man sat

up, looked around, and spoke. Man blinked. "What is the purpose of all this?" he asked politely.

"Everything must have a purpose?" asked God.

"Certainly," said man.

"Then I leave it to you to think of one for all this." said God. And He went away. (p. 177)

つまり，神は創ったものには関心が無く，創ったものの目的を考えることは人間に委ねてしまった。語り手はこれを "trash" と言い，聖書のパロディーである *The Books of Bokonon* も trash と言っている (p. 177)。そんな目的など見つかる筈はない。だが，目的があるかのように考えて行動することには意義があるとボコノン教は考える。ボコノン教の讃美歌に相当する "Calypsos" の一つは

I wanted all things
To seem to make some sense,
So we all could be happy, yes,
Instead of tense.
And I made up lies
So that they all fit nice,
And I made this sad world
A par-a-dise. (p. 90)

と歌っている。この世の全てのものに意義はないかもしれないし，見つからないかも知れない。それなら，いっそのこと嘘を信じればよいではないかというパラドックスを説くのである。真実は機能しないかもしれないが，嘘は機能する。嘘は緊張を和らげ，楽園を作るからである。このプラグマティックな考え方は，サンロレンゾ共和国の問題だけではなく，この作品そのものにもあてはまる。この作品の扉には次の言葉が掲げられている。

Nothing in this book is true.
"Live by the foma* that make you brave and kind and healthy and happy."

—*The Books of Bokonon.* 1:5
**Harmless untruths*

つまり，この作品自体がボコノン教的見解の産物であるというのである。言うまでもなくボコノン教は既成の宗教のパロディーであって，神の真実ではなく，パラドックッスによって人々に生きる希望を与え，嘘によって人々を幸せにすることを考える人間中心の宗教である。かつてキリスト教徒だった語り手の John は，この *Cat's Cradle* を書いている時点では既にボコノン教の信者に転向していることになっている。サンロレンゾ共和国における彼の経験は，信じることを禁止することによって信仰が強まり，嘘によって真の真実が得られるというアイロニーによって，逆説的真実の真実性を学んだと言ってもよい。

病気の大統領 "Papa" Monzano は，自ら禁じたボコノン教の祈りを捧げてもらい(彼は実は隠れた信者だった)，Frank Hoenikker から貰った "ice-nine" を唇につけて自殺する。ところが，この国の記念日の行事として飛んでいた飛行機の一台が墜落して崖に激突し，崖が崩れてその上に建っていた Monzano の宮殿が海に落ち込む。そして "ice-nine" で死んだ Monzano の遺体が海に沈み，海や地上の水分のあるものが全て凍り，"ice-nine" の雨が降って，一切が凍ってしまう破滅が訪れる。語り手は地下の防空壕に避難して助かるが，そのときに *The Books of Bokonon* を通読した。嵐の収まったあと地上に出てきた語り手 John は人々の凍死体の山を見る。そして山からおりてきた Bokonon と初めて出会う。Bokonon は *The Books of Bokonon* の最後の言葉を書いたという。それは "If I were a young man, I would write a history of human stupidity . . . ." (p. 191) ということだった。

このように *Cat's Cradle* は，後半になってパロディーとブラック・ユーモアにあふれたドタバタ喜劇的な展開を示し，"ice-nine" がもたらした氷の破滅に終わるが，前半の科学・科学者に対して，後半では信仰・宗教，それに政治が人間の愚かしさの批判対象として取り上げられている。語り手 John によって書かれた *Cat's Cradle* は，Bokonon が書こうとした "a history of human stupidity" に他ならないことは言うまでもないが，同時に，この書物は，逆説的真実の真実性を教えるボコノン教に語り手自身が転向した顛末を語り，世界の終末を目撃した生存者としての自己体験を語る書物でもある。言い換えれば，この書物は目撃者としての語り手を主人公とする小説であると言える。そして，この点で，"mock-apocalyptic" な "new novel" である *Cat's Cradle* はアメリカ小説の伝統の一つに連なってくるのである。

だが，そこへ行くまでにこの伝統へのつなぎになっているヨナの問題を見てみなければならない。と言うのは，この作品は "Call me Jonah." (p. 11) と書き出されていて，親に John と呼ばれた語り手は，自分のことをヨナと呼んでくれと言う。そしてかりに自分の名前が Sam であったとしても，依然としてヨナであったろうと，ヨナであることに非常にこだわっている。もちろんこの書き出しは，"Call me Ishmael." で始まる Herman Melville の *Moby-Dick* とその語り手 Ishmael を踏まえたものであることは言うまでもない。*Cat's Cradle* はヨナを介して *Moby-Dick* に連なり，そしてさらに *Moby-Dick* に連なる他の小説とも係わって，アメリカ小説の一つの伝統を形成するのである。

Melville の *Moby-Dick* では語り手の Ishmael がヨナに関する Mapple 神父の説教を聞くことになっている。Ishmael が聞くヨナと *Cat's Cradle* のヨナの接点がここで問題になるが，それに先立って，旧約聖書の後ろの方にある12の小予言書の一つ「ヨナ書」を少し見ておこう。「ヨナ書」は四章からなる短いもので，その要旨は次のようなものである。

Ⅰ．主はヨナに，ニネベに行って，その悪のため主の災いが下ることを告げよと命じるが，ヨナは逃げ，反対の方向に向かう船に乗る (I. 1–3)。嵐が起こる。この嵐がヨナの罪によるものであることを知った人々はヨナを海に投げ入れ，嵐静まる (I. 4–16)。主は大いなる魚にヨナをのませ，ヨナは魚の腹の中に3日3晩いる (I. 17)。

Ⅱ．魚の腹の中でヨナは罪を悔い，主に祈る〔詩〕(II. 1–9)。主は魚に命じてヨナを陸に吐き出させる (II. 10)。

Ⅲ．ヨナ再び主の命を受けてニネベに行き，災いの起こることを告げる (III. 1–4)。ニネベの人々改悛し，これを知った主は許される (III. 5–10)。

Ⅳ．ヨナこれに不満を持ち，死ぬことを願うが，東の方に小屋を建て，成り行きを見ようとする (IV. 1–5)。主はとうごまの比喩でヨナにニネベ人と家畜を救ったことを説明する (IV. 6–11)。

Moby-Dick の Mapple 神父の説教はこのヨナ書の二つの点を踏まえたものだった。

1．ヨナは神の命令に逆らって逃げたが，その罪を悔い改めたので，神は大きな魚の腹の中からヨナを救われた。ヨナは悔い改めの手本 ("a model of repentance"[7]) である。

2．(救われた後) ヨナが神の命令を受け入れてニネベに行き，ニネベの人々にその破滅を予言した。マップル神父はこれを「虚偽の面前で真実を説く」("To preach the Truth to the face of Falsehood"[8]) ことの困難さを克服したと解し，この困難を乗り越える勇気に言及している。

Cat's Cradle のヨナは，この第一点に重なってくる。先に述べたように "ice-nine" のために凍結の破滅が起こり，竜巻きが吹き荒れた時，語り手のヨナは大統領の地下の防空壕に避難して三日・三晩ここで過ごして助かる (厳密には四日目にマンホールの蓋をあけて外の様子を知り，安全のためにさらにもう三日辛抱した [p. 179])。「ヨナ書」の場合と事情は多少違うが，「ヨナ書」のヨナが魚の腹の中で神に祈って悔い改めをしたのに対して，*Cat's*

Cradle のヨナは，大地の腹の中の防空壕で「ボコノンの書」に初めて出会って，そこで三日三晩過ごす間にこの本を読んだのだった。それまでに彼はボコノン教について少しずつ理解を深めてきていたが，この地下壕ではじめてその全貌を知ったことになる。この語り手は後にキリスト教徒からボコノン教徒に改宗しているので，三日・三晩地下防空壕にいたことは，魚の腹の中にいたヨナの悔い改めに等しいボコノン教への精神的めざめを経験したといえる。彼はこう書いている。

> "His [Bokonon's] meaning is crystal clear: Each of us has to be what he or she is. And, down in the oubliette, that was mainly what I thought—with the help of *The Books of Bokonon*." (p. 178)

この言葉は，語り手のボコノン教徒としての自己認識の確立を証すものと言ってもよいだろう。

Mapple 神父の第二点の「虚偽の前で真実を説いた」ことは，パラドクシカルな作品の *Cat's Cradle* にあっては，「真実を説かずに虚偽を説いた」と言うべきだろう。ボコノン教徒になったヨナは *Cat's Cradle* を書き起こすにあたって，堂々と「この本には真実は一切ない」([p. 4]) と言ってのけた。だがすでに見たように，Bokonon の言う "a history of human stupidity" の恐るべき真実（例えば，科学者の非倫理性や，政治の不条理性・信仰のパラドックス等）が，真実は一切ない，嘘ばかりだという言葉の裏から暴露されているのである。従って，*Cat's Cradle* のヨナは「虚偽を説きながら真実を示した」と言ってもよいだろう。

しかし，その一方で，*Cat's Cradle* のヨナは聖書のヨナが経験しなかったことを経験した。聖書のヨナは，神がニネベの町に災いをもたらさなかったため，災いの目撃者にはならなかった。ところが，*Cat's Cradle* のヨナはサンロレンゾ島の破滅を目撃する。彼はそのような目撃者となるように必然づけられていたのだった。この役割は作品の冒頭近くで彼の口から語られてい

る。

> "... because somebody or something has compelled me to be certain places at certain times, without fail. Conveyances and motives, both conventional and bizarre, have been provided. And according to plan, at each appointed second, at each appointed place this Jonah was there." (p. 11)

ボコノン教の発想には "as it happened" ということはなく，"as it was *supposed* to happen" (p. 63) と考える。だから，目撃者としてのヨナはたまたま居合わせて目撃したのではなく，*The Day the World Ended* を書こうとしていたため，原爆の時代の世界ではなく，彼の時代の世界の終末の目撃者となり，報告者になるよう必然づけられていたのである。

このように，*Cat's Cradle* の語り手ヨナは「ヨナ書」とは裏返しの関係で係わっていると言える。つまり，この作品の語り手のヨナが「ヨナ書」のヨナと違って，キリスト教のパロディーであるボコノン教に目覚め，"ice-nine" による破滅を逆ヨナ書的に目撃するのは，現代世界の矛盾・歪みを揶揄的な笑いで表現するためであって，*Cat's Cradle* は「ヨナ書」をふまえた現代世界のパロディーであると言える。だが，もう少し言い換えれば，ヨナと自らを呼ぶ逆ヨナ書的な語り手の存在によって，現代社会において既成宗教が救いになっていないことが揶揄的に示唆され，さらに，愛による人々の心の交流を支えにして，不条理に満ちた世界に生きる可能性を与えるボコノン教へのブラック・ユーモア的な期待が示されるが，その一方で，人類に便宜と恩恵をもたらす筈の発達した現代科学が，科学者の倫理性の欠如・アモラルな価値観のために世界の破滅しかもたらさないという矛盾が，これまたブラック・ユーモア的に告発されていると言える。ことに，"ice-nine" が Hoenikker の子供達に渡り，彼らがそれを何の罪意識も持たずに個人の利害のために利用したことについて激しく憤った語り手は，単なる目撃者・報告者には留まらない。彼自身に変革が起こったからである。先に見たように，彼が人類の

"stupidity" に目覚め，逆説的真実の真実性を教えるボコノン教に改宗しなければ，この宗教は狂った新興疑似宗教に過ぎなかったと言えようし，"ice-nine" を作った科学者は次のノーベル賞を貰ったかも知れない。ところがヨナと自ら呼ぶ目覚めた語り手の存在のために，科学者やサンロレンゾ共和国の狂いが狂いとして捕らえられるのである。そしてこのことは，*Moby-Dick* に Ishmael がいなければ，この作品は鯨に片足を奪われた憤りのために狂ってしまった Ahab 船長の自己破滅的な復讐劇に終ってしまうことに通じるし，Nick Carraway がいなければ，Gatsby は自分を捨てた女に未練を捨て切れないウジウジしたさっぱりしない男，少なくとも "great" でない男に留まることにも通じているのである。

そこで，この種の語り手を持つ小説に少し眼を転じてみることにしよう。アメリカ小説には，作中人物が語り手になっている作品が意外と沢山ある。例えば Mark Twain の *Adventures of Huckleberry Finn* のように，主人公自らが語り手になっている例も多いが，語り手が主人公ではなくて，物語の中心人物の周辺にいる作中人物の一人で，この人物の知覚，認識，判断，感情が物語を構成している作品も少なくない。今上に少し触れた "Call me Ishmael" で始まる Melville の *Moby-Dick* がその例であることは言うまでもないが，他にもこの種の作品は少なからずある。例えば，短編では Poe の "The Fall of the House of Usher" が有名だろう。長編小説では，Miles Coverdale を語り手に持つ Hawthorne の *The Blithedale Romance*, Jim Burden が語る Cather の *My Antonia*, Nick Carraway が語り手の Fitzgerald の *The Great Gatsby*, Jack Burden を語り手に持つ R.P. Warren の *All The King's Men* などがある。

このような作品は，それぞれ人物や出来事や背景を異にした固有の特色があるからこそ独自の作品として存在しているのだが，ミクロ的に見たそれぞれの特色・違いは当然のこととして置いておいて，マクロ的視野から見てみ

ると，以外に共通する点が多い。今ここでその詳細に言及する余裕はないが，簡単に共通する特色を列挙してみよう。当然のことながら例外はあるが，マクロ的視野の許容範囲内と考えたい。

1．先ずこれらの作品の語り手が語る中心人物の世界，或いは中心人物が係わっている世界は，伝統的・正統的価値感から見れば，悪もしくは罪，過ち，時には反逆・異端・異常である。Roderick の精神異常，Usher 家のゴシック性は疑問の余地がなく，Ahab の復讐は捕鯨船の本来の目的・機能から逸脱し，Ahab はしばしば正統的キリスト教を冒瀆する言辞を口にし，異教徒的行動をとる。*The Blithedale Romance* の Hollingsworth は犯罪者の更生施設建設という自分の目的のために Blithedale 農場を利用し，土地だけでなく，仲間や資金までをも得ようと計画した。Zenobia はこの Hollingsworth の愛を得るために異母妹の Priscilla を犠牲にしようとした。*All the King's Men* の Willie Stark は批判者やライバルの弱みにつけこんで，脅迫まがいの態度で自分に有利な状況を作り上げる。言い換えれば，これらの中心人物の世界は Moral Wilderness と言うことができるだろう。*My Antonia* の移住してきたばかりの Shimerda 家ですらも例外ではない。

2．ところが，この中心人物やその係わった世界は全て崩壊する。Ahab, Gatsby, Willie Stark は殺され，Hollingsworth 自身は死なないが，Zenobia の自殺を招いて当初の計画は崩れ，自分の過ちを悔いて Priscilla に助けられてひっそり暮らすだけの人間になってしまっている。Shimerda 家でも父の自殺が見られるが，一家のそれからの立直りが強調される点で例外である。

3．語り手がこのような中心人物の周辺にいて，彼らの破滅や彼らの係わった世界の崩壊を経験した当時は，若くて独身で，比較的イノセントであり，経験に乏しく，無知だった者もある。そしてこのような若い語り手は，中心人物の世界が Moral Wilderness であることを知って，反発しながらもかなりのめりこんでゆく。ときには Jack Burden や Miles Coverdale のように，

中心人物の世界から抜け出ようと思うこともあるが，離れていくことを留まらせる何かがあって，結局留まる。この若い人を留めたものが何であるかを簡単に言い切ることは困難だが，Moral Wilderness の妖しい魅惑と Moral Wilderness を越えた彼方に感じられる意味のためと言うことが出来るのではなかろうか。Ahab の Moby Dick に対する復讐は，個人の復讐を越える意味があることを Ishmael は知る。Nick Carraway は自分を捨てて他の男と結婚している Daisy を取り戻そうとする Gatsby に，巨大なロマンチシズムを見て，Gatsby の夢はアメリカを目指してきた移民達の夢、アメリカを育ててきた開拓者達の夢に通じるし，その夢に自分の全てを注ぎ込んだ誠実さを Nick は読みとる。つまり，簡単に言い切れば，Moral Wilderness の多分にシンボリックな意味，あるいは，（シンボリックとは言い切れないものもあるかもしれないから）シンボリックではなかろうかと思わせるアンビギュイティーに語り手は興味を持つと言えるだろう。

4．そしてこのことは，語り手が物語をしている語りの時点とも関係がある。つまり，中心人物の周辺にいた語り手は，目撃者であると同時に参加者・協力者でもあって，その当時の感激・興奮を臨場感豊かに語ることもあるが，大切なのは，その当時から少し隔たりを置いた時点，中心人物の破滅・死亡後何年か経ってから「語り」をしていることである。*All the King's Man* の Jack Burden が語るのは，Willie の死後1年半ばかり経ってからである。Gatsby では「葬式の前後の日を2年後になって思い出してみると，警官やカメラマンや新聞記者が何度となく出入りしていたことしか記憶に残っていない」[9] と Nick が言うように，Gatsby の死後少なくとも二年近くたった後に物語をしていることになる。つまり，中心人物に係わった参加者・協力者であり目撃者であった時から或る程度の時間的隔たりを置く「語り」とは，意味付け・意味探究の為の自己の経験の反芻であり，新たな視座の提供でもある。そして，自己の経験を反芻し，新たな視座で見ることは，自分を確認することに導かれると言える。

5．このような自己確認としての「語り」の物語を可能にするように，語り手には，鋭い感受性の働きと，豊かな想像力の駆使と，語るべき言葉の模索が課されていた。R. Penn Warren は自分の *All the King's Men* の語り手の設定について "a character of a higher degree of self-consciousness than my politician, a character to serve as a kind of commentator and raisonneur and chorus."[10] の必要を感じたと述べている。つまり，この作品の主人公である政治家 Willie Stark より鋭い感受性を持ち，Willie Stark に見えないことが見え，彼に感じられないことが感じられる人物を置き，その人物を一種の解説者・説明役とし，またコーラスの役もさせる必要を感じた，というのである。このような必要性は他の作品の語り手，例えば Ishmael や Nick Carraway などの語り手にも通じるものと言うべきだろう。

6．ところが，Penn Warren はさらに，この様な語り手 Jack Burden を設定して物語を書いてゆくと，或る意味で，物語は語り手である Jack Burden の物語となってしまったと言っている[11]。つまり Jack Burden は Willie Stark についての自分の観察，認識，判断，感情を語ることによって，自己の体験を整理し，意味を与えたのであって，彼の語りは自己確認・自己認識になり，彼の語る物語は自分を主人公とする物語になっていったのである。そしてこれもまた，*All the King's Men* だけの問題ではなくて，他の作品についても言えるのではないかと思われる。つまり *Moby-Dick* は Ahab だけの物語ではなく，Ishmael の物語でもあり，*The Blithedale Romance* は Coverdale の物語，*The Great Gatsby* は Nick Carraway の物語でもある。Poe の "The Fall of the House of Usher" にしても，Usher 家の末裔の Roderick と Madeline の物語ではなく，語り手の物語だ，と見なすことが出来る。Cather の *My Ántonia* にしても，Ántonia の物語ではなくて，Ántonia と少年時代を分かち持ち，彼女を自分の一部と感じた Jim Burden の物語であると言える。このことは，現に，これ等の作品を語り手の物語として論じることが多くなってきている事実にも窺うことができる。

ここでもう一度 *Cat's Cradle* に戻ってみると，*Cat's Cradle* もまた今指摘してきたような1－6の特色を持っている作品である。語り手はフリーランスのルポライターで，若かった頃「今をさる妻二人前，タバコ25万本前，酒3千クオート前」(p. 11) とユーモラスな言い方をしているが，ざっと20年ばかり前のことを振り返って語っている。そしてその時に語り手はキリスト教徒からボコノン教徒に改宗している。つまり，サンロレンゾ島におけるボコノン教との出会いの結果，彼は大きな変革をとげたことになる。そして彼が知った Hoenikker 博士やその三人の子供達やサンロレンゾ島の世界は，文字どうり Moral Wilderness となっていたのだった。

ただ *Cat's Cradle* は，他の作品の物語の中心になっている "king" のような存在感の大きな人物，例えば Ahab や，Hollingsworth, Zenobia, Gatsby, Willie Stark のような人物を欠いている。他の作品ではこのような中心人物の周辺に語り手になる人物がいたのだが，*Cat's Cradle* の場合，語り手が係わることになる人物は，単数ではなく複数だった。つまり Hoenikker 博士の子供達や，サンロレンゾ島に同行した何人かの人々，さらに，サンロレンゾ島の "Papa" Monzano, Mona, Castle 親子そして Bokonon 等である。語り手はこのような人物群が，自分の係わっていくことになる他の作品の Ahab や Gatsby などの個人に代わるものであることを，作品の第一章でボコノン語で "karass" と呼んで規定している。「カラス」とは「民俗的，制度的，職業的，家族的，また階級的境界のいづれにもとらわれない存在」(p. 12) で，或る興味・関心の焦点のもとに係わってくる人々である。*Cat's Cradle* の場合は，語り手が *The Day the World Ended* を書こうとして係わることになった人々である。そして「カラス」の中心軸になるものが "wampeter" と呼ばれるが，「ワンピーター」について語り手は次のように書いている。

> Anything can be a *wampeter*: a tree, a rock, an animal, an idea, a book, a melody, the Holy Grail. Whatever it is, the members of its *karass* revolve about it in the majestic chaos of a spiral nebula.

> The orbits of the members of a karass about their common *wampeter* are spiritual orbits, naturally. (p. 42)

そして語り手は，自分の「ワンピーター」は "ice-nine" であると言っている (p. 43)。そして，この言い方を他の作品に当てはめれば，Ishmael も，Nick Carraway も，Jack Burden もそれぞれ自分達の「ワンピーター」を Ahab の復讐や Gatsby の夢等の形で持ち，「ワンピーター」に係わる中心人物ついて語りながら自分自身の物語を展開したのだった。

W. H. Auden は *Moby-Dick* をふまえて，

> "Most American books might well start like *Moby-Dick*, "Call me Ishmael.'. . . Most American novels are parables, their settings, even when they pretend to be realistic, symbolic settings for timeless and unlocated (because internal) psychomachina."[12]

と言ったそうである。この Auden の言葉は大変大きな事を言っているが，少なくとも，ここに言及した作品に当てはまる言葉であることは否定できない。例えば，語り手の名前だけをとってみても，Ishmael は言うに及ばず，Coverdale (cover dale), Carraway (carried away), Burden など寓意的である。Jonah と呼ばせた *Cat's Cradle* の語り手も勿論例外ではない。そして *Cat's Cradle* は，今述べてきたように，語り手の名前だけでなく，Call me Coverdale, Call me Burden などと書き出してもおかしくない小説群，つまり中心人物（達）の近くに位置する作中人物の一人を語り手に持ち，物語の語り手自身の物語 (story of the teller of a tale) になっていく小説群，に属しているのである。このような小説がアメリカ小説の一つの伝統を形成していると言っても，言いすぎではなかろう。

注

この小論は同志社女子大学英文学会夏期公開講座 (1989. 7. 29) での発表に加筆・訂正を施したものである。

1 Clark Mayo, *Kurt Vonnegut: The Gospel from Outer Space* ("The Milford Series: Popular Writers of Today, Vol. 7"; San Sebastian, CA: The Borgo Press, 1977), p. 28.

2 Jerome Klinkowitz, *Kurt Vonnegut* ("Contemporary Writers"; London: Methuen, 1982), p. 52.

3 John R. May, *Toward a New Earth: Apocalypse in the American Novel* (Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press, 1972), p. 192.

4 Kurt Vonnegut, Jr., *Cat's Cradle* ("1963"; New York: Dell, 1973), p. 21. 以下，この作品からの引用は本文中に頁数を示す。

5 Richard Giannone, *Vonnegut: A Preface to His Novels* ("Literary Criticism Series"; Port Washington, NY: National University Publications, Kennikat Press, 1977), p. 60.

6 Kurt Vonnegut, Jr., *The Sirens of Titan* ("1959"; New York: Dell, 1972), p. 180.

7 Herman Melville, *Moby-Dick*, ed. Harrison Hayford and Hershel Parker ("Norton Critical Edition"; New York: W. W. Norton, c1967), p. 49.

8 *Ibid.*, p. 50.

9 F. Scott Fitzgerald, *The Great Gtsby* (New York: Charles Scribner's Sons, c1953), p. 164.

10 Robert Penn Warren, *All The King's Men* ("The Modern Library"; New York: Random House, c1946), p. iv.

11 *Ibid.*, p. iv.

12 Quoted in Charles Kaplan, "Jack Burden: Modern Ishmael," *College English* 22 (Oct. 1960), 19.

Synopsis

Cat's Cradle by Kurt Vonnegut in the Tradition of the American Novel

Nobunao Matsuyama

Full of the laughter of black-humor, *Cat's Cradle* by Vonnegut presents, in the first half, the moral wilderness of the inhuman, amoral believers in science and scientists and, in the second half, gives a satirical picture of the island republic of San Lorenzo with its preposterous econo-political situations and the parodic new religion of Bokononism which is prospering because it is banned by the government.

The story is pin-pointed around "ice-nine," a new ice which Dr. Hoenikker, one of the fathers of the A-bomb, invented. Ice-nine has a melting point of 114.4 degrees Fahrenheit, and after Doctor's death his three children divided the ice-nine among themselves. One of them came to San Lorenzo with it, and when the dead body of the President, who killed himself by this special ice, fell into the sea, the sea froze, the moist green earth froze, and wild tornadoes of the ice-nine swept the country and the world came to an end.

The narrator had intended to write a book called *The Day the World Ended*, which was to be an account of what important Americans had done on the day when the A-bomb was dropped. But the narrator never completed the book but instead wrote the novel *Cat's Cradle*, which presents as a whole what the holy man of Bokononism wanted to write, "a history of human stupidity."

Worthy of note is the narrator's attitude in this "mock-apocalyptic novel." One of the few survivals of the disaster, he is in fact the witness and reporter. But through his own experience of how scientists really are, how stupid human beings are, how the established religion fails in giving peace to people, how politics functions poorly, etc., the narrator finds the truthfulness of paradoxical truth and lies as propagated by *The Books of Bokonon* and has converted himself to Bokononism.

As a Bokononist, the narrator begins his story with "Call me Jonah," thus connecting the book to the Book of Jonah and Melville's *Moby-Dick*. The narrator Jonah's experience is almost the reverse of the biblical Jonah. But like the biblical Jonah the narrator becomes awakened and as such he tells the story of the stupidity of human beings and its outcome, the destruction of the world. But at the same time the story he tells is the story of his own awakening experience.

In this respect, *Cat's Cradle* finds its place in a group of American novels, in which one of the characters attached close to the central character/s functions as the narrator and tells the story from his point of view. Though not without exceptions, these novels deal with the moral wilderness of the central character/s with either symbolic implications, or ambiguities full of suggestions, and the narrator tells of his fascination for and repulsion against the moral wilderness. His narrative point of view is usually some years after his own experience and the intervening years suggest the narrator's re-experience of what he participated in and witnessed, with emphasis on his search for the significance of his experience and also on the quest for words with which he gives expression to what he realized. Such a novel can be

interpreted as the story of the narrator's own self-recognition.

These novels include, needless to say, Melville's *Moby-Dick*, as well as Hawthorne's *The Blithedale Romance*, Cather's *My Antonia* (though exceptional to a certain extent), Fitzgerald's *The Great Gatsby*, and R. P. Warren's *All The King's Men*. Without the narrator, these novels might have dealt simply with the disastrous failures of the central characters: without Ishmael, for example, Captain Ahab would have been a crazy self-destructive person with no symbolic overtones, and without Nick Carraway, Gatsby would have been simply a fool who wanted to get back his dream of five years ago, merely a man, at least, not "great" at all.

Cat's Cradle also belongs to this group of novels which forms an important tradition of the American novel. Without the narrator Jonah and his awakened narrative point of view, the novel might have been regarded as a funny picture of a scientist and his children and the defunct, crazy island republic of San Lorenzo, and the inventor of ice-nine might have been nominated a prospective recipient of a Nobel prize. The awakened narrator's satirical acuteness, which finds a vent in the indictment against the stupidity of human beings, makes this novel the story of the teller of a tale and as such finds its place within a remarkable tradition of the American novel.